No.94
2023.12.1

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

■地球の木講座2023「森と共にある社会」……1〜3
■ラオス図書プログラム……4
■ネパールプログラム……5
■ラオス「JVCラオス山室さん報告会」……6
■もっと広めたい出前講座……6
■OSA緊急学習会……7
■グローバルeye……7
■インフォメーション/活動日誌……8
■編集後記……8

地球の木講座2023　9／30

内山 節さんと考える
森と共にある社会
私たちと森の新しい関係づくり

地球の木は、日本国際ボランティアセンター（JVC）がラオスで行っている「村人主体の森林保全活動」を、90年代から支援をしてきました。自然への畏敬、足るを知って豊かに暮らす「（自然から）奪わない暮らし」などです。

森は地球の共有財産です。ラオスからの学びを踏まえて、都市部に住む私たちが、もっと「森」について知り、今後どのように自然との共生社会を築いていったらよいのか、長年、哲学の視点から森林と人間の共生の在り方を問い続けてこられた内山節さんをお迎えし、講演をお願いしました。

お話　内山 節さん

1950年東京生まれ。哲学者。森づくりフォーラム代表理事。
在野で存在論、労働論、自然哲学などにおいて、独自の思想を展開する。

■ラオスの村で起こっていること

今ラオスの村では、経済開発の波が押し寄せ、森や土地が奪われて、ダムやプランテーションへと急速に変わっています。一方で、市場経済の浸透により日々の生活に追われる村人自身が、森を拓き、キャッサバなどの換金作物を栽培するようになり、土地の劣化や借金などの問題も出てきているそうです。そんな中、JVCは、村人自身が自然資源や自らの権利を守り、暮らしのあり方を自分たちで決められる社会の実現を目指して活動しています。

■自然と人間の関係の着地点

今回の講演で「自然の違いが人間の基本的な考え方を作る」という話がありました。モンスーン地帯に位置する日本や東アジアでは自然が圧倒的に強く「人間は自然にはかなわないという気持ちで生きている」と。日本にもかつては濃くあった自然信仰ですが、ラオスでは今でも、都会に住む人々を含めほぼ100%の人々が、神羅万象に精霊ピーが宿っていると信じているようです。ピーの怒りを畏れて、木を伐り尽くさないよう、ある期間森を閉じるとも聞きます。

また「自然と人間の関係の着地点はその地域が見つけ出していくしかない」との話もありました。急速に変化していくラオスの村の暮らし。JVCのサポートを受けながら、ラオスの村人たちはどういう着地点を見出していくのか。そして日本の私たちの場合はどうなのか。「空は人間だけのものじゃない」という言葉をかみしめてみたいと思います。

地球の木としては、今回の講演を機に、他団体とも連携しながら、私たちがもっと森に親しみと関心を持ち、自身のライフスタイルの見直しにつなげられるような、そんな活動を進めていきたいと思っています。

（地球の木講座2023実行委員長　中野 眞理子）

■発行 特定非営利活動法人 地球の木 理事会　■発行責任者 磯野昌子　■編集 会報作成チーム　■事務局 〒231-0032 横浜市中区不老町1-3-3フェニックス関内2F
■TEL 045-228-1575　■FAX 045-228-1578　■E-Mail：chikyunoki@e-tree.jp　■http：//e-tree.jp/

「森と共に暮らす意味」　内山 節さん講演

天井も高く広々としたYWCAの会場に、約60名の参加者が「哲学者内山さんの森の話ってどんなのだろう」という面持ちで待っています。山伏修行中という司会者が吹くほら貝の力強く不思議な音の後、「内山です。50年くらい前に群馬県の上野村に行きまして、気に入りまして、以来東京と上野村の両方に住み続けています」と、講演が始まりました。

95%が森の上野村では

急峻な山に囲まれ畑のない上野村には、昔から「森とともに生きていく村を作りたい」という希望があった。森の70%が天然林で、ある程度間伐をするが、切った木の60%は材としては利用できない。それで木質性のペレットにしている。ペレットストーブは使い易いので、村では補助金を付けて特に高齢者に推奨している。またペレットはその半分強を発電にも回している。太陽光発電には功罪があるので、メガソーラー的なものを作る気はなく、また大きなプロペラを回して風力発電をする気もない。村の人に言わせると空は人間だけのものじゃない、鳥もトンボも飛ぶということ。そんな感じで、うちの地域に適したものをいろいろ組み合わせながら循環させていく、そういう仕組みを作っていきたいと思っている。

森も自然も多様であるということ

森には、人工林、天然林、原生林、人が関わって変わっていった森などいろいろなものがある。関東平野にかつて点々とあった平地林、あれは人工林です。農家の人たちが野菜づくりに必要な肥料を作り出すために、葉っぱをたくさん落とす木を植えて作った雑木林です。海岸林の松林も人工林で、海からの風を止めるためのもの。特に日本海側には広いものや長いものがあって、江戸時代の人が苦労して作ったものです。

それから、人が植えたわけでもないが、人間たちの活動によってだんだん変わっていった森もある。青森の白神山地にはブナの一斉林があって世界遺産になっていますが、そのふもとに近い所の森には多種多様の木が生えている。地元の人が頻繁に利用してきた森だからですね。キノコや山菜といった食料だけでなく、薬品として、建築材料や鍬の柄などの道具材として、森からいろいろなものを貰って使っている。うちの村もそうですが、利用している木や植物は全部合わせると100種類くらいにもなるようです。

自然の違いが人間の基本的な考え方を作る

和辻哲郎さんが「世界は草原、砂漠、モンスーンの３つの地帯に分けられ、その自然の違いが人間の基本的考え方に変化を与えた」と言っています。砂漠地帯の自然は非常に厳しく残酷でもあり、人間中心、もっと言えば部族中心にならざるを得ない。対してヨーロッパ的世界を草原地帯とし、弱い自然が存在すると言っている。ヨーロッパにも森はたくさんありますが、確かに日本に比べると自然の力、成長の力が弱いですね。同じ島国でもイギリスと日本を比較すると、もともとあった木の種類はイギリスが日本の10分の１くらい。そういう場所では、人間が弱い自然を守って保護しなければならないという考え方が生まれる。産業革命を経てヨーロッパの歴史も失敗を繰り返し、草原地帯の人たちは、自然と人間は秩序立った関係にあるのが一番いいんだ、という考え方を生んでいく。一方、東アジアのモンスーン地帯は何しろ自然の力が強い。台風も豪雨も日常的にあり、人間は自然にはかなわないという気持ちを持ちながら生きている。

そういう風に自然の状態が違ってくると人間の基本的な考え方も変わってくる。そしてまた自然への人間のかかわり方が違ってくると森も多様になる。例えば、日本ではリンゴ畑ですが、フランスでは管理している自然ということで、果樹園は森に数えられる。

日本社会にある一種の自然信仰について

上野村では、山に今でもたくさんの山の神が祀ってあってみんなで大事にしている。水が湧き出る所には水神様。日本には仏教は古代からあるし神様もいっぱいいる。自分の生きている世界のどこかに神様が、あるいは仏様がいて、自分たちを守ってくれている。それを普通に感じてきた。家族が亡くなると仏壇を用意して手を合わせたりする。特別な信仰というわけでもなく、そうすると気持ちが落ち着く。我々は宗教でも信仰でもない、そういうものをいまだに残している。森や木もそんなものと一緒にあった。日本の社会における一種の自然信仰というのは自然の中に真理のありかをみつけていく、そういうもの。

着地点はその地域が見つけていくしかない

自然というものが様々に展開するにも関わらず、自然をこのように管理するのが正しいんだ、人間はこのように自然と付き合えばいいんだという、秩序の理論を作り上げてはいけない。その発想が帝国主義を生みだし今もそんな考え方の時代を作っている。秩序の思想ではなくその地域の思想でなければいけない。森と人間の関係に、世界を覆うような理想の関係はなく、その地域に適した関係があるのです。いい悪いは別にして地域も変わっていく。暮らしは変化していくけれども、どこに着地したら自然と人間の関係が、少なくともどちらかがどちらかを破壊するような関係にならないか、それはその地域の人が見つけていくしかない。

グループに分かれての話し合い

参加者の質問に内山さんが答えました

Q 日本の場合、農業は家族農業がベストだということですが、その辺をお聞きしたい。

一番大事なのは持続性。そして実は家族農業以外に持続したものはない。ソ連時代の国営農場と集団農場、中国の人民公社という共同農場、どちらも失敗しています。アメリカも一部が大型の企業農業という感じですが、土地が荒廃して来て将来的に持続性がないんじゃないか。家族経営くらいのものが事実として一番いい。林業などの山の関係もそうですが、持続ということを念頭におかないと結局社会を壊してしまう。

Q 都会にいる人たちはどう森と付き合ったらいいのか。

目に見えるものや触ったりできるものだけを「自然」だと感じるようになったのは、実は明治以降の人間です。江戸時代、長屋に住んでいる庶民は身近に森や木などない暮らしでしたが、自然とともに生きていた。遠く富士山や丹沢、日光や筑波、そういう霊山から流れてくる、今の言葉で言う”気”を肌で感じる力を持っていた。水にも、川の源流から流れてくる”気”を感じていて、そういうものとともに自分たちがあるということを、ビシッとつかんでいた。明治以降の不正をこれから問い直していかなければいけない。市場経済がすべて、というのもそのひとつ。市場経済では手に入らないものがたくさんあるよね、ということです。

Q 「地域」という枠組みをどうとらえたらいいのか。

昔のように固定的に考える必要はない。関係が地域を作ります。例えば、上野村には猟師が100人くらいいますが約半分は都会の人。田舎の人たちのために動物を少し駆除しなければという気持ちで土日にやって来てくれる。村の猟師集団は、それで維持できているわけです。また、祭りや行事の助っ人にも、今はそういうのを覚えたいという都会の若者が結構いて、年間を通してやってきます。村の基本的な事を大事に思って通ってくる人たち、そういう人たちを含めて、その地域は創造されます。

Q 地域がそれぞれ一番いい自然との付き合い方の着地点を見つけていくというお話でしたが、なかなか難しいのでは。

上野村の場合は、周りが全部山ですから、元々村外に働きに出るということがなく、村の中でやっていく仕組みを作らざるを得なかった。その村が持続するかどうかは、自分たちの暮らしを大事にしているかどうかですね。規模が小さくても祭りや行事が残っているかもひとつのポイント。それと、雇用場所がないからこの村が崩壊したとよく言われますが、違います。やりたい仕事があって外に出ていく、人口移動があってもいいんです。でも村を大切にする、それが大事です。

（会報作成チーム　斎藤 和子）

ラオス現地情報「図書館は教育上、意味があるのですか？」

地球の木は、特定非営利活動法人「ラオスのこども」（以下ALC）の活動に賛同し、2022年度より、子どもたちが自ら未来を切り拓くことを願い活動を続けています。図書館の整備や活用は、子どもたちの教育にどのような効果があるのでしょうか。40年活動を続けるALC事務局長である野口朝夫さんとラオス現地で図書活動に取り組む中等学校の校長先生とのやりとりをご紹介いたします。

ヒンフープ中等学校の校長先生と野口さん（左）

図書館の教育効果

― ALCニュースレター83号より―

「図書館は教育上、意味があるのですか？」

以前、私たちの活動を支援してくれている外務省やJICAの方々と話し合った際のやりとりです。「根拠は？」とも問われました。確かに、図書館があれば就学率が上がる、進級率が改善されるというようなデータは手元にありません。私たちは図書室の直接的な「効果測定」は結構難しいと実感してきました。ところが、事業終了にあたり、今回３校を回った際、校長先生が言うのです。

「図書館ができたので進学率が10％上がり20％となった」これは用心して聞かねばと根拠を尋ねたところ、彼はこう答えてくれました。

「学校にはこれまで教科書以外に図書はほとんど無かった。それが図書館ができ、生徒たちは本を自由に読むことで、自分たちの周り以外にもっと違う世界があると知り、また読書は面白いと実感することができた。そこで、生徒はもっと、広く世界を知りたい、学びたいとの思いに至り、さらなる学びの場として、職業訓練校や単科大学、大学などに進む生徒が増えたのです」

生徒たちにとっての希望の職業は、これまでは身近で活躍する警官や兵士、役人、教師などでした。これが、自動車修理やコンピューター技師、サービス業など広い分野が目に飛び込むようになってきたというのです。

視野を広げるというのは、図書館が当たり前の日本では当然の機能と無自覚になっていましたが、ラオスで、この機能の意義をはっきりと実感することができました。

（ALC事務局長　野口 朝夫）

ハックプン・ボランティア便り（ハックプンはラオス図書プログラムの愛称です。ラオス語でハック（好き）プン（本）です。）

「ラオス語翻訳貼付活動」は、プログラム開始当初の予想を遥かに超える皆様のご協力とご参加をいただいています。９月には2022年度の貼付活動をまとめた【ハックプン・ボランティア便り】を発行しました。

【ハックプン・ボランティア便り】は、絵本をご寄付いただいている方、貼付ボランティアの方、図書プログラムチームが、それぞれの思いを知り、個々の力が一体となって大きなチームになることで、今年度の活動を更に充実させるきっかけ作りにしたいとの思いで発行しました。

また、ボランティアの方のご協力なくしては成り立たないプログラムですので、このプログラムをご存じない方、参加したい方などに向け、活動を知っていただくという目的もあります。

貼付活動は地球の木事務所のある関内近辺で行っています。その他、ご自宅で貼付していただくことも可能です。今年度、既に絵本のご寄付は163冊！貼付ボランティアさんを大募集しています。お気軽に地球の木にお問い合わせください。

〈今後のボランティア活動予定〉

■１月12日（金）13:30～15:30　なか区民活動センター

■１月30日（火）13:30～15:30　横浜市技能文化会館

お詫びとご報告

昨年度および本年度も、ラオス語翻訳の貼付を行う絵本の各出版社に、絵本の表紙の使用許諾を得て活動を行っています。お礼と共に、会報誌を各社にお送りしたところ、『わたしのワンピース』のペープサートと動画について、出版元であるこぐま社から著作権の問題があることをご指摘いただきました。著作権の取り決めに準じて、2022年度制作したペープサートと動画を抹消することといたしました。

このペープサートと動画の制作にご協力いただきましたボランティアの方々、ご支援をいただいている皆様には、このようなご報告になりましたことを心よりお詫び申し上げます。

著作物を扱う活動であることを再認識し、著作権に関する理解を深め、活動をつづけて行きたいと思います。

（ラオス図書チーム　相馬 淳子）

教育の大切さを理解した地域の人々

地球の木とパートナーNGO・SAGUNは、2021年からネパール・インドラサロワール農村自治体（以下IRM）で、教育の質向上に特化したプログラムを実施しています。

IRMでは、教育の重要性を理解していない先生や保護者が多く、恒常的な教師不足も手伝って、生徒たちは学力が低く、高校を卒業しても仕事がないため鬱になる若者や自殺者も出るような地域でした。

そのような地域でSAGUNは、生徒たちが自分の意見をしっかり言えるようにと作文トレーニングや、先生たちへの心理カウンセラー養成トレーニングを行ってきました。常に話し合いを大切にし、その中から出てくる人々の声を活動に反映します。IRMには21の学校があるため、校長先生をはじめとする先生方、学校運営委員会、生徒や保護者たちとの話し合いには多くの時間を要しましたが、今年度に入ってから、生徒たちが特に苦手だった数学と科学で大きな進展がありました。

数学のモデル授業

５月31日～６月２日、ファシリテーターを招いて実施した数学のモデル授業には、小学校１校、中等学校２校から１～７年生 約220名、教師15名が参加しました。生徒たちは、図形などの教材を用いた授業を楽しみ、従来の教え方を踏襲していた教師たちにとっても、大きな学びがありました。授業を参観した教育コーディネーター、区長、州議会議員も、地域の教育の課題を知ることができました。

科学発表会

一方、マハチュニ中等学校でも、８月22～25日、専門家と教師各２名を招いて科学の特別授業と発表会を行いました。６～10年生、保護者、教師を含む125名が参加。区長も参観しました。

同様の科学イベントは、９月12～17日、カリデヴィ中等学校でも開催され、６～10年生と科学の教師合計100名、保護者、教師、区長も参加しました。

大にぎわいの科学発表会

区長（右端）も参観

火山について説明する生徒

地域が動き出した！

生徒たちは、これらの特別授業や発表会で数学や科学がよくわかるようになり「これで試験はバッチリできる！」と大喜び。教師たちは、これまでの教え方が悪かったことを恥じ、効果的な教授法を会得しました。ここで注目すべき点は、特別授業や発表会の経費の一部を現地の関係者たちが分担したことです。教材費の75％を区、25％を学校が負担し、ファシリテーターの宿泊場所や食事を学校とコミュニティーが提供しました。また、生徒や教師の要望に応え、国会議員が数学・理科実験室への支援を約束しました。教育の重要さを理解した地域の人々が動きだしたのです。

最優秀賞を取った！

９月27日、SAGUNのマハンタさんから嬉しい知らせが届きました。

地球の木ファミリーの皆さま、ナマスカール！

初めて支援地で開催したSAGUN総会が素晴らしいものとなったことを地球の木の皆さまにお伝えすることができて嬉しいです。

マハチュニ中等学校が、IRM教育省主催の科学大会（Science Exhibition）で優勝したことは、私たちの大きな成果です。このイベントには中等学校６校が参加し、各校最大３種目の発表をすることができます。マハチュニとカリデヴィの両校は、しっかりと準備して３種目プラスαの発表をし、マハチュニは最優秀賞を獲得しました。カリデヴィは残念賞でした。

マハチュニ中等学校は素晴らしいパフォーマンスを見せ、ロケットランチャー（ロケットの発射筒）など、競技には含まれない特別な実験を行いました。生徒たちは、自分たちの学校ですでに２回発表しているので、自信をもってプレゼンテーションに臨みました。

私たちは、このイベントに参加するために、コンサルタント会社（Bosk Education Private Limited）に依頼し、２人のエンジニアと理系大学生を指導のために派遣してもらいました。

マハチュニ中等学校は、この優勝によって郡レベルの大会に参加する資格を得ました。私たちは、これから参加に向けて準備をしますが、今年のダサイン祭りは、10月21日から26日ですので、学校はすでにお休みになっており、皆お祭り気分です。おそらく、準備はダサイン祭りが終わってからになるでしょう。ハッピーダサイン！

（ネパールチーム　乳井 京子）

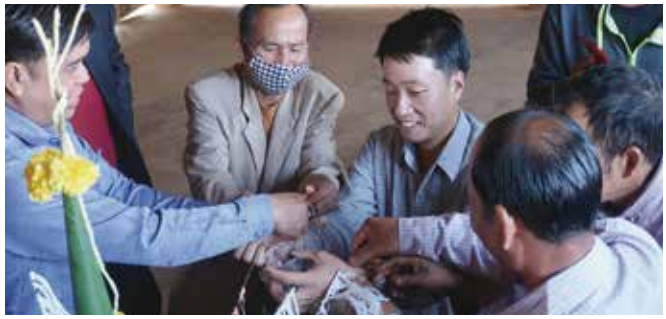
from Laos ――JVCラオス現地駐在員 山室さんの報告会　7／20

セコン県の支援村で、村の人たちと話し合いを重ねています

私たちが支援をしているJVC（日本国際ボランティアセンター）のラオスプロジェクトは、セコン県での活動が昨年8月から正式に始まりました。一時帰国中のJVCラオス現地駐在員、山室良平さんを迎え、横浜市のなか区民活動センターで話を聞きました。写真をたくさん見ながらの現地の話は興味深いものでした。

ラオスは、国としては高度成長の時期。海外からの投資と借入で経済発展路線上にあるが債務がかさんでいる。ラオスの中でも田舎のセコン県には、ゴムのプランテーションが広がっており、近いこともあってベトナムの企業のものが多いという。雇われる村人の作業は樹液を採って溜めること。賃金の問題や公害も発生し、村人を苦しめている。もう一つ目立つのはキャッサバやコーヒーなどの換金作物栽培が盛んなこと。目の前の必要からやむを得ず共有資源を取り崩して栽培している実情がある。キャッサバは需要が高く、他の作物より量もとれてお金になるため、ほとんどの世帯が栽培しているという村が多い。しかし連作障害が出るなど長い目で見ると問題も多いという。

村をとりまくそんな状況の中で、JVCの実際の活動は何かというと「ほとんどが村人との話し合いですね」と山室さんは言う。村人が自分たちの村を知り、共有資源の価値を確認し合い、コミュニティー林や魚保護区を作ってみんなで守っていく、それらのサポート。また住民のための法律研修をおこない、行政への提言活動にも目を配っていく。そういう活動でまず一番に大事なのは「住民との話し合い」ということなのだろう。　（ラオスチーム　斎藤 和子）



コミュニティー林設置式典での山室さん（右）

出 前 講 座

もっと広めたい出前講座

出前講座「ネパール・タルー族の家族ゲーム ～識字がもたらすもの～」

６月10日、鎌倉女学院高等学校での「出前講座」に初めてファシリテーターの丸谷さんのアシスタントとして参加したネパールチームの勝田さんは、体験を次のように述べています。

「講座は、地球の木のネパールでの支援活動をもとに『字の読めないことがどれだけ毎日の生活に支障が出て大変であるか』をわかりやすく知ってもらおうと作られています。講師の一方的な講義でなく、ゲームやクイズなどで生徒が自然と文字の読めない生活を疑似体験できる構成で、楽しみながら文字が読めることの大切さを教えられます。とても優れた教材であると改めて思いました。

今までネパールという国のことをほとんど知らなかった生徒たちに、ネパールの国に近づいてもらえたし、コミュニケーションや家族が支え合う大切さなどをこのワークショップを通じて感じてもらえたことは、大きな成果であったと思います。この出前講座がもっと頻繁に色々な学校で実施されれば良いのにと思います。」

出前講座「アジアの国を知ろう、ラオスってどんな国？」

７月15日、町田市立真光寺中学校で１年生に向けて今年も出前講座を実施しました。地図や写真を映しながら「ラオスはこんな国ですよ」とファシリテーターの中野さんが丁寧に、時に熱く語りました。何かを問いかけても、ちょっと静かな教室でしたが、「ラオス語で言ってみましょう」の呼びかけには、「サバイディ！（こんにちは）」「コプチャイ！（ありがとう）」と元気に答えていました。水を入れたバケツを天秤棒で担ぐ体験はやはりいつもの人気があります。

（アシスタントの斎藤さんの報告から）

夏休み親子企画「知ってる？ネパール」

８月17日、横浜市磯子区の「いそご多文化共生ラウンジ」で、初めての出前講座を実施しました。ファシリテーターは丸谷さん、そしてアシスタントは磯野さん。小学３～６年生の子どもたちが対象で、大人も含めて21名という多くの参加がありました。スライドを使ってのお話はとてもわかりやすく、絵を描いたり、切り貼りしたりのワークもあり、参加者は飽きることなく、知らない知識にふれることや考えることを楽しんでいる様子でした。子連れで参加したネパール人から、「子どもは日本で生まれたので、ネパールのことを知らない。ぜひ、このような講座をいろいろなところでやってほしい」と感想をいただきました。

（出前講座チームの乳井さんの報告から）

いそご多文化共生ラウンジにて

地球の木・WE21ジャパン共催　緊急学習会　8／8

”日本の国際協力が変わる！！「OSA」について考えよう！“

オルタナティブ生活館での対面とオンラインのハイブリッド開催

世界のあちこちで紛争が起き、「戦後最も厳しい安全保障環境」という政府の言葉に、緊張した空気が漂う。平和主義に徹してきた日本の国際協力の大切な形が失われ、武器を輸出できる可能性を秘めたOSAが導入された。これまで平和国家として海外からの信頼をひしひしと感じながら支援活動をしてきたJVC代表理事・NGO非戦ネットの今井高樹さんから話を聞きました。

2023年４月OSA（政府安全保障能力強化支援）が閣議決定された。これは「同志国の軍などを対象とした無償の防衛装備品の供与やインフラ整備支援で、対象国軍の能力向上を図る」という新たな枠組みだ。OSA要綱には、巧妙な言い換えや、拡大解釈できる用語があり、これまで貫いてきた非軍事原則が崩されていく。国会議論もなく成立し、将来的には供与した武器が誰にどのように使われるのか、監視の目が届かないといった様々な疑念が生まれる。ウクライナ、台湾有事など、脅威論が飛び交い、与党のみならず野党議員の中でも軍事国家に対する抵抗感がなくなってきているという声も会場から聞かれた。しかし軍事力で平和が守られることは決してないと今井さんは強調する。

（会報作成チーム　浜辺 美英子）

グローバルeye

東ティモールを知っていますか？

～ NGOパルシックのスタディツアーに参加して ～

磯野 昌子

クロロ村にて（右端が筆者）

私が東ティモールに行くと言うと、大抵の友人が「アフリカ？」と聞いてきた。東ティモール民主共和国はインドネシアに隣接するティモール島にあり、21世紀に入ってから独立した最も新しい国の一つである。

私がこの国を知ったきっかけは、フェアトレードである。2015年に私が地元の逗子市で行っているフェアトレードタウン活動の一環として「逗子珈琲」を開発する際、数種類のフェアトレードコーヒーを飲み比べ、投票により東ティモール産のコーヒーが選ばれた。私はこの時から生産地に行きたいと願ってきたが、ようやく今夏にそのチャンスが訪れた。地球の木のトルコ・シリア地震の緊急救援募金先であったNGOパルシックが主催するコーヒー生産者を訪ねるツアーに参加した。

バリ島で飛行機を乗り換え、１時間で首都のディリに着く。首都とは思えない素朴な街並みのそこかしこに戦争の傷跡が残っている。この国の歴史については映画「カンタ！ティモール」を見て欲しい。16世紀から400年もの間ポルトガルの植民地となり、太平洋戦争時には4年間日本の植民地下におかれ、軍隊慰安所も設置された。戦後はポルトガルに返還され独立を訴え続けたが、1975年にインドネシアによる侵略が行われ、その後20年以上に及ぶ闘争の中で破壊と虐殺が繰り返された。実に国民の４人に１人、何十万人に及ぶ人々が犠牲となった。この間、国際社会は東ティモールの惨劇に沈黙し、日本政府は侵略を繰り返すインドネシア政府とその軍隊を多額のODAで支援し続けた。私は、自分の税金が虐殺に使われてきたことを知らずに、この国をフェアトレードで支援していると考えていたことが恥ずかしかった。知らないことは罪である。

首都から車で３時間、さらに川を渡り森を抜けて２時間ほど歩いた山の上に今回のツアーを受け入れてくれたクロロ村がある。茅葺屋根の下、電気も水道もなく、真っ暗な家の中で薪をくべて煮炊きをし、10人を超える家族が一つの鍋を囲んで談笑をする。標高1,500mの寒さの中でも裸足にサンダル姿の村人たちは、その大半がコーヒー農家として生計を立てており、暮らしは決して楽ではない。しかしながら、悲しみの歴史を乗り越えて、祖先から継承されてきた暮らしを守り、家族を何より大切にし、歌を愛する人たちの優しさと温かさが心に染みた。これは33年前に初めてネパールに行った時に感じたものだ。

開発途上国の生活向上を目標に掲げる国際協力やフェアトレードは、どれだけ彼らの生活を「向上」させたのだろうか。クロロ村にスマホが入るのも時間の問題だろう。スマホは生活を便利にはするが、その代償は計り知れない。家族と向き合う時間の何倍もの時間をスマホやパソコンの画面に向き合っている自分に、国際協力を語る資格はあるのだろうか。まずは自分の生活とその影響を知ることが、国際協力の第一歩なのだとあらためて思う。

年末募金2023

今の私たちが未来をつくる

皆さまの日ごろのご協力に心より感謝申し上げます。地球の木は、現地での対話と交流を大切にネパールやラオスの自立支援を継続しています。国や民族、文化の違いを超えてよりよい未来をつくるために、皆様からのあたたかいご支援をお願いします。
詳細はホームページ、または、チラシをご覧ください。
年末募金は2024年1月31日まで受け付けています。

ネパールの子どもの未来を担う教師たち

寄付領収書について

地球の木へのご寄付は、所得税等の控除対象になります。

控除を受けるためには、地球の木が発行する「寄附金受領証明書」（領収書）を添えて、確定申告する必要があります。2023年にいただいたご寄付の領収書は2024年１月下旬に郵送でお送りいたします。

また、地球の木ではサポート会員の会費が控除対象となります。サポート会員の会費の領主書はお申し出いただいた方のみお送りしておりますので、必要な方は事務局までご連絡ください。

イベント情報

あーすフェスタかながわ2023

12月3日（日）10:00～17:00
場所：象の鼻パークおよび
神奈川県庁本庁大会議室
主催：あーすフェスタ
かながわ実行委員会

「みんなで育てる多文化共生」をテーマに、多文化共生について語り合うフォーラム、多彩な文化を知るステージ、体験型のワークショップなど、参加者が気づきを得られる場を提供しています。

デポー展示会

12月11日（月）
つなしまデポー

活動日誌（6月～11月抜粋）

■6月
8日　ラオス図書貼付ボランティア
10日　出前講座（鎌倉女学院高等学校）
17日　第1回通常理事会

■7月
4日　ラオス図書貼付ボランティア
15日　出前講座（町田市立真光寺中学校）
15日　第2回通常理事会
20日　ラオスプログラム
「JVCラオスプロジェクト報告会」

■8月
8日　緊急学習会「『OSA』について考えよう！」
10日　ラオス図書貼付ボランティア
17日　出前講座（いそご多文化共生ラウンジ）
24日　第3回通常理事会
29日　「もったいない」ボランティアデー

■9月
5日　ラオス図書貼付ボランティア
11～12日　デポー展示会（緑園）
23日　第4回通常理事会
30日　地球の木講座2023

■10月
1日　多文化フェア@なかやま
2日　クラフト学習会
12日　ラオス図書貼付ボランティア
13日　相続セミナー（遺贈学習会）
16～17日　デポー展示会（ほんもく）
21日　第5回通常理事会

■11月
3日　ラオス図書貼付ボランティア
3日　フェリス女学院大学 大学祭
4日　オルタ館フェスタ
5日　鎌倉国際交流フェスティバル
15日　ラオス図書貼付ボランティア
@フリースクールここだね
17日　中間監査
18日　東日本復興まつり
23日　ラオス図書貼付ボランティア
24日　第5回通常理事会
26日　ひらつか市民活動まつり

編集後記

◆今回の「地球の木講座」の実行委員であるＳさんは、いつもとても筆まめ。今回もお友達や知り合いに「良いお話なのでぜひ来てね」と手書きで誘いのハガキを20枚以上出しました。嬉しいことにそのうち半数の人が参加して下さったとのこと。最近は、つい手早いからと何でもメールで連絡をとってしまうけど、私も時にはゆったりと友達にハガキを出してみよう。Ｓさんのように楽しいイラスト付きにはできないけれど。（Y.N）

特定非営利活動法人 地球の木 EARTH TREE